

書評

文化移植：いかに移民達は祖国でのそれとほぼ同じように移住先で生計をたてるのか

著者：ギャレット・ジョーンズ

出版先:スタンフォード大学出版、2022年

書評者：アルドリック・ハマ

(格言) りんごが木から遠くに落ちることはめったにない

外国人の日本への移民、そしてその日本社会への影響についてもっと真剣に検討する必要がある。メディアが個々の移民を大々的に取り上げ、社説が多文化主義の楽しさを論ずる以上に。政党政治家やポピュリストも明快な日本の移民政策を持っていないようである。しかしながら、思慮深い考察をすれば、「日本人は人種差別的である」という道徳的パニックになる。実際、ジョージ・メイソン大学のギャレット・ジョーンズ教授が推察しているように、主要メディアや左翼活動家は、多様性を「明らかに不道徳と言わないまでも、面食らうようなもの」としてとらえている」。

いかなる国も領土の保全とその文化的継承を維持する権利を有している。外国人観光客も自国の観光客も無意識にこれらの事実を認識に、地球上で無二といえるユニークな日本の文化を見聞し、体験するために多額のお金を使う。実際、2025年の上半期で、記録的な数字の外国人観光客が「人種差別主義的」日本を訪れた。

世界中の大企業や左翼活動家達は、大規模かつ無制限の外国人移民に対する彼らなりの言い分があるが、キーとなる共通の認識は、移民たちはすぐに移住先の文化や価値観に順応し、完璧に同一化するということである。大規模な移民を歓迎する人々は、まるでジョーンズをはき替えるように簡単に自分自身の文化や価値観を変えることができると信じている。かくて、このように考える限り、結局のところ自国民と移民の間に何らの摩擦も生じはしない。

移民は迅速に異国の文化に同化し、彼らにとって異質の価値観を受け入れるというこの基本的な考え方は、正しいだろうか。長い目で見て、人種的、文化的に多様な国々は、どうなっていくのだろうか。

著者のジョーンズ氏は、本来十分な考慮に値するが、実際はそうはされていない疑問に取り組んでいる。ジョーンズ氏によると、最初の疑問に対する答えは、移民とその子孫は、彼らの先祖代々の価値観や文化的慣行に長い間固執する。従って、絶対的、完全な異文化への同化はない。同時に、移民達の価値観や文化が、移民先の国の国民に浸透していつて、徐々にではあるが、究極的にはその国の文化にも避けられない変化を与えていくこと

になる。最終的に、長い年月の間に、より大きな人種的、文化的多様性が、社会信用を弱め、社会的結合力を解き、社会の対立をもたらすことになりうるだろう。

ジョーンズ氏は、国家的オピニオン、信仰、そして価値を長きにわたり記録している膨大な量の米国（一般社会調査 the General Social Survey）と国際的（世界価値調査 the World Values Survey）調査資料を研究している。著者は、～系とつくアメリカ人の価値や行動を祖国におけるそれらと比較することによって同化について考察している。例えば、「スウェーデン系アメリカ人はスウェーデン人によく似ていますか。イタリア系アメリカ人はイタリア人によく似ていますか」とジョーンズ氏は聞く。

興味深いことに、価値観は世代を超えて、平均的に言って、第一世代の曾孫の代まで存続する。ジョーンズ氏は、「国家が繁栄するために欠かせない必須の要素」として、信用性のような価値について調べている。まず発見したことは、アメリカ人諸民族は異なる信用水準を持ち、これらは出身母国の信用水準に匹敵する。それから、高い信頼感のある社会の出身は、その信頼感の約半分を彼らの子孫に継承し、信頼感の低い社会の出身者はその低い信頼感の約半分を子孫に伝える。国家の繁栄に不可欠なその他の要素、例えば、儉約性も同様にその後続く世代へと伝承し、存続していく。

著者は、国家の繁栄に不可欠な価値、信頼性や儉約性は、くっついて離れないと指摘するが、いくつかの人種グループに見られた歓迎されない要素もまた同様に粘着性がある。

そこで、移民政策は、「良い」価値観を持つ潜在的移民を見つけることであろうが、しかし、「良い」価値観とは一体どんなものなのか考える必要がある。例えば、著者は強い家族的価値観を持つ国々は、平均して、より低い賃金とより高い失業率を持つ傾向がある。著者はその理由を次のように考える。「家族の近くにいたいと思えば、最適な仕事を広く、遠くに求めることはできない。」また著者は次のように指摘する。強い家族的価値観は、他の価値観、例えば、安定した仕事、社会的問題を解決するために経済に介入する政府に対する支持にも関係している。そのような価値観は、移民の政治的見解を形成するであろうし、ひいては彼らの投票行動にも影響する。

同時に、著者は、時の流れの中で、その国生来の文化に対する変化が感知できると指摘する。著者は、これを食物の好みにおけるアメリカ人の変容によって示す。イタリア系移民は彼らの本来の調理法をアメリカ人の好みに合うように調整する（例えば、肉の量を多くする）。しかし、肝心なことは、イタリア系移民が彼らの本来の調理法をアメリカ人の好みに合うように変えたとしても、それはやはりイタリア料理であり、それは永遠にそうである。イタリア系移民はアメリカの総人口の6%ほどであるが、イタリア料理はアメリカ

において最も知られたエスニック料理である。

著者は、生粋のアメリカ人と移民の間の相互作用を、「文化的変化のスパゲッティ理論」と呼ぶ。つまり、生来の文化や価値は、移民の文化や価値に目に見える形で影響を与え、この逆もまた真である。文化的に異なり、本国民と違った価値観を持つ移民を受け入れようとする者は、その国本来の文化や価値観におよぼす潜在的「スパゲッティ効果」について注意深く考えるべきである。

実際、著者は、それぞれの国を他の国々と区別するものは何かを読者に示すことに尽力している。人々、特にほんの一握りである革新的技術者とその技術革新の歴史は、国家の富の顕著な予言者であり、例えば、地理的位置よりも重要である。著者は、1500年以降記録された技術革新の歴史と、一人当たり収入との間の重要な関係を示す。歴史的、近代的技術革新が起きたヨーロッパと日本を含む東アジア諸国は、たとえばアフリカや南アメリカの国々よりも一人当たりより高い収入を示す傾向がある。他の地域と較べてヨーロッパや東アジアにおける技術者の顕著な多さは、認識能力と文化価値において、根本的に差があることを示している。（著者はまた、前著「蜜蜂の巣箱心理」 *The Hive Mind* において、国家の繁栄に対する認識知能の重要性を追求している。）

多文化国家における社会的軋轢、特に民族的ネットワークと居心地の良い財政的政治的な政府との結び付きによって国家経済を支配する少数派民族とのそれは、イエール大学のエイミー・チュア教授によって総括的に記録されている。

東南アジアにおける中国人移民の物語は、チュア教授が言う「市場を支配する少数派が、多数派の国民及び自由市場社会を排除するまでに完全に支配した場合に、どういうことが起きるのか」に対する予防的警告の意味合いを持つ。

東南アジアにおける中国人の少数派は、単なる商人や農業従事者から、彼らのビジネス的洞察力と民族的つながりを利用し、そして移住先の政府の小切手帳の役割を果たすことによって、国営や多国籍大企業を所有する億万長者へと急速に進化していった。

近代のインドネシア社会における悩ましい経済的不平等や政治的失望に対する反応は、少数の中国系インドネシア人に対する定期的な大衆暴動である。最も苛烈な反中国人暴動は1998年に起き、中国人婦女子の暴行、殺人、広範囲な略奪を引き起こした。マレーシアでの反中国人暴動の最も大きなものは1969年に起きた。それ以来、教育、経済そして政治におけるマレーシア人の参加を推進し、一方で少数の中国系マレーシア人の進出に歯止めをかけるための人種的割り当て制が導入された。

日本の予想される人口統計を考えれば、日本の高い生活水準と高度な技術革新を維持するために、移民によるものであれ、日本の出生率の向上によるものであれ、高度な技術と学歴を持つ人々が必要とされる。選択的な移民政策はプラスになるであろうが、反面、国民的価値や文化に及ぼすその効果については明白ではない。日本の政策担当者は、著者が提示した次の質問を自問することになるだろう。今日の移民は日本的価値や文化に見合うものなのか。そして彼らの子孫達の日本の価値や文化への影響はどのようなものなのか。将来の観光客は、やっぱり日本を訪れたいと思うだろうか。